

論 文 要 旨

鹿児島大学

Association between satisfaction with meaningful activities and social frailty in community-dwelling Japanese older adults (地域在住高齢者の重要とする活動の満足度と社会的フレイルとの関連)

氏 名： 宮田 浩紀

【はじめに】

フレイルは、身体的側面だけでなく心理的および社会的側面を含む多面的な構成要素として認識され、これらの側面は互いに相互作用し、健康への悪影響が報告されている。社会的フレイルに関連するこれまでの報告では、社会的フレイルの有病率、身体的フレイルより先行する、死亡リスクの増加などが示唆されている。そのため、社会的フレイルが高齢者にとって深刻な懸念となる可能性がある。

高齢者が重要な活動に従事することは幸福につながるということが明らかになっている一方で、重要な活動の満足度が低いとうつ症状や認知症との関連すること報告されている。しかし、重要とする活動の満足度の程度によって高齢者が重要とする活動に違いがあるのかについては明らかにされていない。本研究の目的は、高齢者の重要な活動の特徴と、その活動に対する満足度と社会的フレイルとの関連を明らかにすることである。

【方法】

解析対象は、鹿児島県垂水市における垂水研究2019年に参加した地域在住高齢者596名であった。本研究の解析において、65歳未満の者、脳卒中や認知症の既往がある者、主要データの欠損者は除外した。重要とする活動調査は、作業洗濯意思決定支援ソフト（Aid for Decision-Making in occupation Choice: ADOC）を用い、活動に対する満足度を5段階で評価した。その他、社会的フレイル評価、歩行、握力、認知機能、高次生活機能などを含む心身機能に関するデータを得た。ADOCで選択された最も重要な活動に対する満足度で4～5と回答したものを高満足グループ（487名）、その他を低満足グループ（109名）の2グループに分けた。両群を比較し、活動の満足度の高低で重要とする活動や性別における満足度の違いによる活動カテゴリー、社会的フレイルの下位項目との関連、社会的フレイルとの関連、心身機能等に差があるかを解析した。

【結果】

全参加者のうち社会的フレイルの有病率は18.6%であり、低満足グループは、社会的フレイルの有病率（ $p = 0.004$ ）、うつ傾向（ $p < 0.01$ ）の割合が高く、高次生活機能（ $p = 0.026$ ）が有意に低かった。重要とする活動に関しては、両グループ間での有意な差は認められなかった（ $p = 0.549$ ）。高満足グループでは、趣味（27.9%）が最も多く、次に対人交流（17.9%）を選択していた。さらに重要な活動と活動満足度の男女別の比較において男性（ $p = 0.611$ ）、女性（ $p = 0.904$ ）と有意な差は認められなかった。また、ロジスティック回帰分析では、社会的フレイルは活動の満足度と有意に関連（未調整モデル OR 2.02 95%信頼区間1.251–3.268 $p = 0.004$ ）し、共変量を調整した調整モデル2（OR 1.78 95%信頼区間1.068–2.990 $p = 0.027$ ）においても社会的フレイルと活動の満足度は有意に関連していた。また、低満足グループは、社会的フレイルの下位項目において、家族や友人役に立っていないと感じる（ $p = 0.005$ ）、毎日誰かと話をしていない（ $p = 0.05$ ）割合が有意に高かった。

【まとめ】

本研究では、重要な活動の満足度が低いと、社会的フレイルやうつ症状の割合に影響することが示唆された。また、重要な活動の満足度の程度によって選択された重要な活動に差は認められなかった。これらの結果から、活動の種類に関係なく、個人が重要とする活動に参加し、これらの取組を継続することが重要であると考えられた。